

研修レポート  
比較文化学部 江頭浩樹

本研修の目標の一つは、Egashira (2014)及び Egashira (2015)の中で理論の基盤にした、編出分析(Excorporation Analysis)の更なる妥当性を示すことにあった。このことを示すためにはこれまでの分析を簡潔に概観する必要がある。

編出分析の意義は、生成文法誕生以来の懸念事項であった主要部移動がもたらす問題である、構造の拡張条件(Extension Condition)の違反の回避にある。句の移動は一般的に構造を拡張するという条件に従い、この条件に違反すると派生が破綻する。しかし、主要部位道の場合はそのようなことは起こらない。これが大きな問題になっていた。この問題を巡っては、生成文法の創始者である Noam Chomsky も、(i)主要部移動は統語論での移動ではなく、音声を扱う PF 部門での移動である。(ii)主要部移動は統語論での移動である。これら2つの考えで揺れ動いている。前者の立場に立てば、拡張条件の違反をうまく説明できる。また後者の立場に立てば、主要部移動が従う相対化最小性(Relativized Minimality)の違反による(非)文法性の説明可能である。

- (1) a. John could have completed the job?  
b. Could John have completed the job?  
c. \*Have John could completed the job?

(1c)の助動詞 have の移動は、他の主要部 could を差し置いて移動しているので相対化最小性の違反である。しかし、なぜ拡張条件を破っているにも関わらず非文法性を引き起こさないかの説明が未解決のままである。

この事実を受け、Tonoike (2008a, b)では編出分析が提案された。この分析は主要部移動を(i)他の主要部との複合体を形成し、(ii)上位の主要部が下位の主要部の音声をともなって移動をすると想定する。この想定では、拡張条件の違反は起こる可能性は全くない。例えば(1b)では助動詞の could は C と複合体を形成し(2a)、C が could の音を伴いながら編出し TP と併合をする。

- (2) a. [TP John C-could have completed the job].  
b. [CP C-/could/ [TP John {could} have completed the job]]?

(2b)では構造は TP から CP へと拡張されている。これで拡張条件の違反を回避できたことになる。またこの理論では(1c)の様な最小性の違反も起こることはあり得ない。なぜならば(2)では C と have は複合体を形成しないからである。

Egashira (2014, 2015)では編出分析に依存しながら、主語条件の新たな説明が試みられている。これらの論文の意義は過去に扱われたことのない新たなデータを分析の対象にしていることにある。通常主語の一部を取り出すことは、主語条件に違反し非文法性を引き起こすと考えられている。

(3) \**Of which car<sub>i</sub> did [the driver t<sub>i</sub>] cause the accident?*

しかし、埋め込み文からの主語の一部を取り出しても非文法性を引き起こさない。

- (4) a. *Of which car<sub>i</sub> do you think [CP that [the driver t<sub>i</sub>] will cause the accident]?*  
b. *Of which major<sub>i</sub> is it important [CP for [the student t<sub>i</sub>] to major physics]?*

いずれの場合も、wh 句の *of which car/of which major* が埋め込み文の主語の位置から取り出されているが、非文法的ではない。(4)は従来の生成文法の枠組みでは(3)と同様に主語条件の違反として排除されてしまう。しかし編出分析を採用すれば、(3)を排除し(4)の文法性を説明することが可能である。分析の詳細は Egashira (2014, 2015)を参照。

これまでのところ、編出分析が(i)主要部移動の拡張条件違反の回避、(ii)主語の一部の取り出しの可能性を説明できることを簡潔にした。編出分析が妥当な言語理論であるならば他の現象も説明可能なはずである。そこで研究の対象にしたものが、複合名詞句制約である。複合名詞制約とは次の(5)の様な文である。

- (5) a. \**What<sub>i</sub> did Mary believe [NP the fact [CP that John had stolen t<sub>i</sub>]]?*  
b. \**Where<sub>i</sub> do you know [NP the boy [CP that Mary met t<sub>i</sub>]]?*

(5)では、複合名詞句([CP ...[NP...]])から wh 句が取り出されている。両構文は Chomsky (1986)以前では「複合名詞制約」の違反ということで排除されていた。しかし、Chomsky (1986)で障壁(Barriers)理論が提案され、(5b)の取り出しは、関係節の CP が障壁となり排除される。その一方で、障壁理論によれば(5a)の同格節の CP は障壁にならず、取り出しが可能になるはずである。(5a)の文法性が示す様に、この説明は事実を捉えていない。これを説明するために Chomsky (1986)は(5a)の CP は N (fact)によって属格が与えられ、そのような環境下では CP は障壁にはならないと規定している。規定とは言語理論を含め科学理論が避けなければならないことである。

この1986年以降から未解決の問題を編出分析で解決を試みた。また提案する解決案が他の現象にも応用可能であることを示し、編出分析の妥当性を示すことを試みた。

まず複合名詞句は D (the)-N (fact)-C (that)-T(had)が語彙複合体を形成し、それぞれの主要部が順次編出と併合を受けると想定する。この想定に従って(5a)がどのように排除されるかを示していく。派生のが(6)まで進んだと仮定する。(6)では TP に語彙複合体 the-fact-that が併合し CP が形成されている。

(6) [CP the<sub>[uF]</sub>-fact-that<sub>[uF]</sub> [TP John had stolen what]]

(6)の語彙複合体の位相主要部である、D (the)と C (that)は解釈不能な素性[uF]が付与されている。派生の次の段階では(i)TPの内部にある what が C が持つ[uF]のために、CPの指定部に移動する可能性、(ii)語彙複合体 D (the)-N (fact)が編出し CP に併合し NP を形成する可能性がある。ここで両派生を比較すると、(i)は what の移動と[uF]の素性の照合を含むが、(ii)の派生は語彙複合体の併合のみである。経済性の観点から、(ii)の派生が(i)の派生に優先されると考えられる。

(7) [NP the fact [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John had stolen what]]]

派生はこの時点で破綻することになる。なぜならば、that が持つ[uF]が未照合のままだからである。(8)の様に NP が構築された後に what が CP の指定部へ移動する派生も考えられるかもしれないが、この派生は構造を拡張していないので、拡張条件の違反で排除される。

(8) \*<sub>[NP the fact [CP what that<sub>[uF]</sub> [TP John had stolen t ]]]</sub>

仮に(7)の派生が破綻することなく DP まで形成され、その指定部に wh 句が移動し、D が持つ[uF]を照合したと仮定してみる。

(9) [DP what [D the<sub>[uF]</sub> [NP the fact [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John had stolen ]]]]]

この構造でも、やはり C (that)が持つ[uF]が照合されていないので、派生は破綻する。

(9)の構造から what が CP の指定部に下降(lower)し C が持つ[uF]を照合することも考えられるが、この派生は拡張条件の違反であるので、容認されない。

(10) \*<sub>[DP what [D the]<sub>[uF]</sub> [NP the fact [CP that]<sub>[uF]</sub> [TP John had stolen ]]]]</sub>



以上が複合名詞句、特に名詞補文からの取り出しの非文法性の説明である。なおこの分析については、Egashira(2020)として準備中である。

上で提案した名詞補文からの取り出しの禁止の説明によって、他の現象が説明可能ならば、編出分析の妥当性がさらに高められると考えられる。このことを示したのが江頭(2019)である。以下簡潔にこのことを示していくことにする。分析の対象にした構文は次の(11)である。

- (11) a. \*What did Mary regret [CP that John had stolen]?  
 b. \*What did Mary whisper [CP that John had stolen]?

(11)では動詞の補文の that 節から wh 句の取り出しが起こっていて、非文法的である。通常動詞の補文からの取り出しは非文法性を引き起こすことはない。

(12) What do you think [CP that John stole ]?

障壁理論の分析によれば、(11)の補文の CP は動詞 regret/whisper によって L 標示され障壁にならないはずである。しかし事實は補文の CP が取り出しを阻んでいると考えなくてはならない。これを捉えるために提案されたことが CP は補文ではなく、付加部とする分析である。しかしこの考えは CP が「命題」という意味役割を動詞から与えられていることを捉えることが出来ない。別の分析はもともとは動詞の補部に生成されるが、派生のある段階で付加部の位置に外置されるという考えである。しかしこの考えも、なぜ補文が外置を受けるのかということがうまく説明できない。

編出分析では、CP が動詞の補文であるとしながら、CP が wh 句の取り出しを阻むことをうまくとらえることが出来る。ここでは(11a)を例に取って説明していく。いわゆる叙実動詞(factive verb)に関しては次の(13)を想定する。

(13) いわゆる叙実動詞(factive verb)は v\*-V (regret)-C (that)-T の複合体を形成する。


この想定に従って、補文の TP から v\*-V (regret)-C (that)が編出し TP に併合し CP を形成したとしよう。

(14) [CP v\*<sub>[uF]</sub>-regret-that<sub>[uF]</sub> [TP John stole what]]

(14)の語彙複合体の位相主要部である、v\*とC(that)は解釈不能な素性[uF]が付与されている。派生の次の段階では(i)TPの内部にあるwhatがCが持つ[uF]のために、CPの指定部に移動する可能性、(ii)語彙複合体v\*-regretが編出しCPに併合しVPを形成する可能性がある。ここで両派生を比較すると、(i)はwhatの移動と[uF]の素性の照合を含むが、(ii)の派生は語彙複合体の併合のみである。経済性の観点から、(ii)の派生が(i)の派生に優先されると考えられる。

(15) [VP v\*<sub>[uF]</sub>-regret [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John stole what]]]

派生はこの時点で破綻することになる。なぜならば、thatが持つ[uF]が未照合のままだからである。(16)の様にwhatをCPの指定部に移動させる派生も考えられるかもしれないが、この派生は構造を拡張していないので、拡張条件の違反で排除される。

(16) \*<sub>[VP v\*<sub>[uF]</sub>-regret [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John stole what]]]</sub>  


仮に派生がthatが持つ[uF]を照合せずに、v\*Pの位相まで進み、v\*Pの指定部にwhatが移動し、v\*の持つ[uF]を照合したとしても、thatが持つ[uF]が照合されないため、依然として派生は破綻する。

(17) \*<sub>[v\*P what [v\* v\*<sub>[uF]</sub>-regret [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John stole ]]]]</sub>  


もちろん、(17)のv\*Pの指定部のwhatが埋め込みのCP指定部に下降しthatが持つ[uF]を照合するような派生(18)は、許されない。なぜならば、そのような派生は拡張条件の違反になるからだ。

(18) \*<sub>[v\*P what [v\* v\*<sub>[uF]</sub>-regret [CP that<sub>[uF]</sub> [TP John stole ]]]]</sub>  


以上が叙実動詞補文からの取り出しの禁止の説明である。注目すべき点は叙実動詞補文を叙実動詞の補部として捉え、外置などの移動操作などをかけたりしていない点である。

同様の分析が、whisperなどの非架橋動詞補部からの取り出しの禁止に関しても、可能である。すなわち次の(19)を想定する。

(19) v\*-whisper-C (that)-T

従属節からの wh 句の取り出しが関わる場合には、位相主要部である v\* と C (that) に[uF]が付与されることにより、C (that)が持つ[uF]が未照合のままになり派生が破綻することになる。

以上示したように、編出分析は主語条件のみならず、複合名詞句、特に名詞補文からの取り出しの禁止、叙実動詞補文からの取り出しの禁止、非架橋動詞補文からの取り出しの禁止を説明することを可能にする。

今回のハワイ大学の研修では、外池滋生先生との共同研究を進める中で、先生の著書「ミニマリスト日英語比較統語論」(開拓社)の出版に当たり、初稿原稿から最終稿まで読ませて頂くことができた。その中には先生の斬新的な分析がいくつも披露されていて、大きな刺激を受けることが出来た。

参考文献

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.

Egashira, Hiroki (2014) *On Extraction from Subjects: An Excorporation Account*,  
Doctoral dissertation, Aoyama Gakuin University.

Egashira, Hiroki (2015) *On Extraction from Subjects: An Excorporation Account*,  
Kaitakusya, Tokyo.

Egashira, Hiroki (2020) "On Extraction from Noun Complement Clauses,"  
Tokyo Metropolitan Linguistics.

江頭浩樹 (2019) 叙実動詞補文・名詞補文・非架橋動詞補文からの取り出しの  
禁止について 大妻比較文化 20